

論文の要旨

論文題目 現代日本語における思考動詞の意味分析
氏名 高橋 圭介
学位 博士(文学)
授与年月日 平成18年3月23日

本稿では、人間の精神的活動を表す動詞の中でも基本度の高い「思う」「考える」「しる」「わかる」「認める」「信じる」の6語を取り上げ、意味分析を試みた。

まず、二章では、動詞全体における「思考動詞」の位置付けについて検討した。その際、類語辞典の記述に基づく意味的な観点からの位置付けと、主に動詞分類に関する先行研究の知見に基づいた、文法的な観点からの位置付けという、二つの観点からの位置付けを行った。まず、類語辞典の記述を検討したところ、本稿における主な考察対象語のすべてにゆるやかな共通性を認める類語辞典がある一方、「思う」「考える」「信じる」と「しる」「わかる」「認める」をそれぞれ別のグループに分ける類語辞典もあることが確認された。また、文法的振る舞いに着目し、「思考動詞」(と目される動詞)と「思考動詞」に隣接すると考えられる動詞を比較したところ、「引用節をとれる」という特徴によって「思考動詞」を規定すべきであるとの結論に達した。

第三章では、本稿において個別的分析に用いる諸概念を概観した。具体的には、<主体>や<対象>といった意味特徴の中身や、別義間の関連付けに用いる「隠喩」「換喩」「提喩」の3種の比喩、さらには複数の意味を統括するモデルとして「ネットワークモデル」「現象素」、そしてそれらを統合した「統合モデル」について、具体例に基づきながらその中身を概観した。

第四章から第八章までは個別的分析である。まず第四章では、「思う」と「考える」の基本的な相違点として<自己制御性>の違いとヲ格名詞句の(一般的な)性質の違いを指摘した。<自己制御性>に関しては、命令形や意向形の使用の可否、及び解釈の違いなどから、「思う」は<非自己制御性>を示す動詞であり、「考える」は<達成の自己制御性>を示す動詞であることが明らかとなった。また、ヲ格名詞句の違いに関しては、名詞句の<コト性>に着目し考察を行った。その結果、「思う」が<コト性>を持つ名詞句と持たない名詞句の両方を補語としてとりうるのに対し、「考える」は<コト性>を持つ名詞句のみを補語としてとることがわかった。それに合わせて、「~(の)こと」という形式を(単に先行する名詞に<コト性>を付与する形式ではなく)「名詞句の指示範囲を拡大する形式」と見るべきであることを主張した。また、多義語分析の結果、各語に以下の別義を認定した。

(ヲ格名詞句を伴う「思う」の別義)

- ・別義 1 : (<外部からの刺激により>) <ある対象(の属性や対象に関する事柄)を>
 <意識する> 例: 遠く離れた故郷のことを思った。
 - ・別義 2 : <ある対象(人・組織)を> <大切な存在として> <意識する>
 例: 子供を思う親の気持ち
- (ヲ格名詞句を伴う「考える」の別義)
- ・別義 1 : <新しいアイデア(解答、解決策)を生み出すために> <知力を働かせる>
 例: 環境問題を考える。
 - ・別義 2 : <知力を働かせて> <新しいアイデアを生み出す>
 例: 新製品を考える。
 - ・別義 3 : <ある対象を重要なものとして捉え> <その対象について>
 <注意を払う> 例: 体のことを考える。
 - ・別義 4 : <ある対象の属性や対象に関する事柄について> <知力を働かせる>
 例: 明日の試験のことを考えると、うんざりする。
 - ・別義 5 : <知力を働かせて> <未知の事柄を> <予測する>
 例: 万が一を考えて、予備を用意した。
 - ・別義 6 : <既知の事柄に基づいて> <判断を導くために> <知力を働かせる>
 例: 日頃の成績を考えると、彼の合格は難しいでしょう。

「思う」の別義 1 と 2 は提喩によって関連付けられる。また、「考える」の別義 3、1、2 は換喩に基づく関係にあり、3 つの別義全体で現象素を構成していると考えられる。隠喩により関連付けられる別義 1、5、6 は<目的意識を持って> <知力を働かせる> というスキーマ的意味を内在している。別義 4 は<目的意識> という特徴が脱落していることから、このスキーマ的意味と隠喩に基づく関係にある。また 3 種の比喩すべてが関与している「考える」に関しては統合モデルによる多義構造の記述を試みた。

第五章では、引用節を伴う「思う」と「考える」の意味分析を行った。意味分析に先立ち、まず「思う」と「考える」がとりうる文型を整理した上で、認識動詞構文の位置付け、さらには構文論的アプローチと本稿の「構文」に対する見方の比較・検討を行った。認識動詞構文については、引用構文との類似性から、引用構文から派生された構文であるとの見方が主流であったが、本稿では引用構文とは異なる独自の構文としての位置付けを行った。また、「構文」に関しては、ラネカーが提唱する使用依拠モデルに基づく見方が妥当であるとの見解を示した。以上のような、文型に関わる議論に続いて、多義語分析を行い、その結果として以下の別義を認定した。

(引用節を伴う「思う」の別義)

- ・別義 1 : <(外部からの刺激により) 主体内部に生じた感情・感覚を>
 <意識する> 例: 彼に始めて会って、おもしろい人だなと思った。
- ・別義 2 : <主体内部に存在する判断内容を> <意識する>
 例: 商店が閉まらないうちに買い物をすまそうと思った。

(引用節を伴う「考える」の別義)

- ・別義 1 : < 結論を導くために > < 知力を働かせる >

例 : どっちにしようかと考えた。

- ・別義 2 : < 知力を働かせて > < 結論を導く >

例 : これにしようと考えた。

- ・別義 3 : < ある事態を > < 仮定する >

例 : 仮に彼を犯人だと考えよう。

「思う」の別義 1 と 2 は隠喩により関連付けられる。「考える」の 1 と 2 は換喩、2 と 3 は隠喩によってそれぞれ関連付けられる。多義語分析の後、これまで多くの研究者によって取り上げられてきた基本形文末用法の「と思う」について、現在までの研究の流れを概観した。その上で、主要な先行研究に基づき「と思う」の意味を別義 3 として以下のように記述し、多義構造内への位置付けを試みた。

- ・別義 3 : < 主体内部に存在する判断内容を > < 表明する >

「思う」の別義 3 は、換喩により別義 2 と関連付けられる。

第六章では、「しる」と「わかる」の意味分析を行った。まず類義語としての比較を行い、「しる」は補語名詞句に新規情報としての解釈を要求する動詞である一方、「わかる」は補語名詞句に「XはYである」という解釈を要求する動詞であることが明らかとなった。また、< 一般性 > (< 個別性 >) という概念を導入することにより、「しる」と「わかる」がとる補語の(上で述べたものとはまた異なる)解釈の違いを説明した。さらに、以上の考察で明らかとなった特徴により、「しらない」と「わからない」の違いも分析が可能であることを示した。類義語分析に続いて行った多義語分析では、「しる」と「わかる」に以下の別義を認定した。

(「しる」の別義)

- ・別義 1 : < 主体が > < (主体にとって) 新規の情報を > < 得る >

例 : 曾野綾子という小説家の存在を初めて知ったのは、昭和二十九年である。

(第六章の例文(17))

- ・別義 2 : < 主体が > < これまで体験したことのなかったことを > < 体験する >

例 : { 酒 / たばこ } をしった。負けをしらない。

- ・別義 3 : < 主体が > < ある状況に > < 気付く > 例 : 知らぬ間に汗をかいていた。

- ・別義 4 : < 主体が > < (主体にとって) 既知の対象と > < 何らかの関連を持つ >

例 : 誰がどうなろうと知ったことではない。

(「わかる」の別義)

- ・別義 1 a : < 主体に > < ある対象と > < その対象が持つ内容を > < 同定する >

< 能力がある > 例 : 彼は中国語がわかる。

- ・別義 2 : < 他者の依頼・命令を > < 受け入れる >

例 : 「よし。怪しまれないように身辺を見張っている」「分かりました」

「しる」の別義 2、3 と 1、別義 1 と 4 はいずれも換喩により関連付けられ、全体として一つの現象素を構成している。「わかる」の別義 1 と 2 は換喩による関連付けが可能である（尚、「わかる」の別義 1 にはさらにいくつかのヴァリエーションがある）。

第七章では、「認める」の多義構造を記述した。別義は以下の通りである。

・別義 1：<ある範囲に注意を払うことにより> <対象を> <捉え>

<(あらかじめ持っている)対象に関する知識と同定する>

例：逃走中の犯人の姿を認めた。

・別義 2：<外部の状況（他者の意見・指摘なども含む）を> <妥当なものとして> <受け入れる> 例：罪を認めます。

・別義 3：<他者の能力や（能力の反映である）作品を> <価値のあるものとして> <受け入れる> 例：彼の才能は誰もが認めている。

・別義 4：<他者が未実現の行為を行うことを> <妥当なものとして>

<受け入れる> 例：入学を認めます。

別義 1 と 3 は換喩、2、3、4 は隠喩により関連付けられる。また、別義を認定する過程で類義語との比較を行った。具体的には別義 1 と「気づく」「見つける」、別義 3 と「評価する」、別義 4 と「許可する」を比較し、相違点を明らかにした。

第八章では、「信じる」とその類義語である「信頼する」「信用する」について分析を行い、以下の結果を得た。別義 1 と 2 は提喩、1 と 3 は換喩により関連付けられる。

（「信じる」の別義）

・別義 1：<主体が> <未確認の事柄を> <真であると> <みなす>

例：彼（の言うこと）を信じよう。

・別義 2：<主体が> <（宗教・思想など）ある特定の考えを> <正しいものと>

<みなし> <それに従う> 例：彼はキリスト教を信じている。

・別義 3：(<事実とは認定できないほど>) <ある事柄の程度が甚だしい>

例：彼がそんなことを言うなんて信じられない。

第九章では、第四章から第八章までの個別的分析の成果を踏まえつつ、主に「アスペクト」と「意志性」という二つの観点から、本稿の考察対象語を改めて比較し、思考動詞内部の暫定的な整理を行った。その結果、「思う」「信じる」のアスペクトを記述するには「維持」という概念が有効であること、「信じる」「認める」の意志性を考えるにあたっては、これらの動詞が有する<他者(の能力)への依存度>の高さを考慮する必要があることを指摘した。